

# 論 述

## 注 意

1. 問題は全部で9ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

問一 傍線部(1)～(5)の漢字の読みをそれぞれ平仮名で書きなさい。解答用紙(その一)を使用

問二 傍線部(A)で著者は「ぼんやりすること」と「急がないこと」は違うと言っています。文中から「ぼんやりすること」と「急がないこと」の適切な例を一つずつ選び、その例に即して両者の違いがわかるように、それぞれ一〇〇字程度で説明しなさい。全体で二〇〇字以内に収めること。解答用紙(その二)を使用

問三 著者は串田孫一のうちに現代の風潮に対する批判的な姿勢を見て共感しています。現代社会が体現する価値観と著者らの価値観との相違を簡潔にまとめた上で、この相違に対するあなたの考えを述べなさい。全体で八〇〇字以内に収めること。解答用紙(その二)を使用

ぼんやりしている時間は非常に大切に貴いと書いたのは哲学者の串田孫一だ。

あの『山のパンセ』を書いた串田は、詩人であり、ナチュラリストであり、画家であり、戦後が生んだ屈指<sup>(1)</sup>の思想家だったと私は思っている。

いくら串田先生の言葉だといっても「貴い、という言葉にはちよつとひつかかる」という人もいるだろう。「ぼんやりはいかん、ぼんやりしていたんでは人生のバスに乗り遅れるよ」という人もむろんいるはずだ。

でも、私は「ぼんやり」という言葉が好きだ。

串田の「無為の尊さ」という短いエッセイは繰り返し読んでいく。こういう一節がある。

「ぼんやりしているのは人間にとって非常に大切な時間である。単に漠然と貴いと言っている訳ではなく、この間に、本人ほどの程度意識しているか分らないが、必ず貯えられているものがある」

ぼんやりすることだなにを貯えるのか。そのことを、そんなに性急に畳みかけるように尋ねたりしないものだ、と串田はエッセ

イのなかで私たちの性急さをたしなめている。

そう、それを尋ねるのなら、尋ねる前に、なにはともあれ、自分でぼんやりしてみるのがいちばんだと思う。

小さな公園のベンチでもいい。コーヒー店でもいい。鎮守の杜の木洩れ日のなかでもいい。とにかく、ぼんやりを体験してみることに、まずはそこから始めたい。

いちばんいいのは風の吹き抜ける静かな場所に坐り、背を伸ばし、肩の力を抜いてみることだろう。深呼吸をする。坐っていても、立っていても、深呼吸のやり方は変わらない。深呼吸は息を吐くことに重きをおく。吐いて、吐いて、さらに吐く。細く長く吐ききるまで吐く。あなたのからだはまだまだ硬い。ゆつたりとした気分になり、さらに肩の力を抜いてみる。下腹の丹田を意識する。

深い呼吸をしながらぼんやりしていることが、あなたにとって快い状態になればしめたものだ。ときには、<sup>(2)</sup>静寂が皮膚にしみこむのを体感することができるかもしれない。静寂のなかでぼんやりすることの気持ちよさを味わうことができれば、それは至福への第一歩になる。

近所に、緑のゆたかな公園があれば、なおさらいい。

そういうところには、きっとあなたの好きな木が何本かあるはずで、好きな木の前に立つてぼんやりする時間を持ちたい。

「ぼんやり」という言葉と「貴い」という言葉は、ふつうあまり結びつかない。しかし串田は、それを手品師のように鮮やかに結びつけている。その結びつけ方があまりにも鮮やかで、あまりにも自然なので、私はすんなりと合点した。よく考えてみれば「ぼんやり」と「貴い」を結びつけるのは、相当の力技かもしれない。

串田の数々の文書を読み、それらはみな、長い黙想のなかで湧き水のように流れてきたもの、という感じを私はもっている。

昼あんどんと呼ばれた大石内蔵助は、たぶん、ぼんやりしている時間をもつことを習性にした人だったと思うし、三年寝太郎も、それこそ、ぼんやりが大好きな人間だったのだろう。ぼんやりする時間を多くもつ人間だったからこそ、大石は、成功率の高い復讐劇の筋書を創りあげる力を貯えることができたのだろうし、三年寝太郎もまた、独りでぼさーっとしている時間を多くもつ

たからこそ、いつのまにか成功物語のあれこれを練り上げ、結局は、その夢を実現したのだろう。大石内蔵助も、三年寝太郎も、復讐や成功という結果を得る目的のために、ぼんやりする時間を多くもったわけではないだろう。ぼんやりする時間をたのしむところこそが、ふたりのなかの創造の芽を育てたのではないか。

ここで考えておきたいのは、ぼんやりを卑しむ風が最近はいつそう強まってきている、ということだ。

人から「うすぼんやり」といわれて、ありがたがる人はまずいない。仕事でへまをやり、「ぼさっとしているからだぞ」と上司に叱られれば、つい「すみません」と頭を下げるのがふつうだろう。子どもが机を前にして、ただただぼおーっとしていれば「ぼんやりしないで、勉強に集中しなさい」と親は叱る。

「ぼさっとする」「もさっとする」「ぼかんとする」といった系統の言葉は、このご時世ではたいてい、実に肩身の狭い思いをしながらかろうじて生きつづけているのだ。

落ち着きすぎてぼんやりすることがしばしばでは、入学試験や入社試験に遅れをとるだろうし、面接で、打てば響く答え方ができず、ぼやーっとしてしまふ質の人はどうしても不利になる。

だから「ぼんやりすることは貴い」などという最高級の褒め言葉をもらって、いちばん驚いているのは「ぼんやり」系の言葉たちではないか。

いまは「いらいら・せかせか」から「ゆつくり・ぼんやり」へ、社会的な変速装置の切り替えが必要な時代ではないか。

むろん、勤勉とか着実とか丁寧とか持続力とか、そういうものの価値を私は否定しない。勤勉で着実で丁寧で持続力のある職人たちの手になる春慶塗の盆がすばらしい光沢を放つことも知っている。

同時に「ぼんやり」「ぶらぶら」の時間をもつことが、すぐれたものを創りだす上できわめて大切なものを与えてくれる、ということとはありうる話だと思う。

飛騨高山の春慶塗の名人に会ったことがある。じつに丁寧な仕事をする評判の職人だった。いかにも、漆塗りの仕事が好きで好きで、という感じの老人でもあった。一定の湿度を保つために、部屋は夏でも締め切っている。八十をすぎるころまでは朝の六

時ごろから仕事をはじめ、ときには夜中まで続けた。

でも、「ぼんやり」の時間がなかったわけではない。密室での仕事に疲れると、真っ裸になって屋根に登り、「ひっくりかえって、太陽を浴びるんです」という話を聞いた。顔に手拭いでもかぶせて、好きなだけぼんやりした時間を過ごしたのだろう。それが老人にとって、心身の健康を保つ貴重な時間だったのだと思う。

串田は山のなかの「一本の木」に会いにゆく話を書いている。いかにもこの人らしい話で、私は、繰り返し読んだ。

ある山を登っていた時、夏草のなまましいにおいのなかで一本の木に出あう。水樋だった。「夕暮の空が薄赤く染まり出すまで、この木の木蔭で三、四時間を過ごした。何もせずに、別にこれと言ってまとまったことを考えた訳ではないが、決して無駄な時を過ごしたとは思わなかった。そればかりでなく、何か貴い時を過ごすことが出来たのが素直に楽しく、いつとはなしに自分一人でそこを水樋の丘などと呼ぶようになった」

一本の木の陰に坐って、ぼんやりと何時間も過ごす。何もせずにときを過ごす。それは決してむだな時間ではない。

串田にとって、気に入った木のそばで送る「何もしない時間」は、ずいぶんと幸せなときだったろう。そして、そこで過ごした時間は、深呼吸することのすがすがしさ、ゆったりとしたときを過ごすことこのころよさ、一本の木と相對することの歎び、大自然のなかに抱かれていることの至福感、などを教えてくれたことだろう。

後日、またその木に会いにゆく。

「その木の姿が目に見えなくて来ると、一日の休みをつくって、木と共に過ごすために出掛けて行った。駅から歩いて二時間足らず、またやって来たことを遠くから知らせるために、大きく手を振りながら、しかし駆け寄りたりせずに、ゆつくり草を分けて行った」

串田は山を歩きながら、姿のいい木や、静かな水辺に来ると、立ち止まり、坐りこみ、二時間でも三時間でもぼんやりと時を過ごすが好きな人だった。それがこの人の山歩きの流儀だった。

ずいぶん昔の話になるが、取材のため、串田家を訪ねたとき、こんな話をうかがったことがある。

「山梨のある低山に登ったときです。ヤブをかきわけて道のないところを進んでゆくと、沢がありましたね」  
香りのいいコーヒーをいただきながら、話を聞いた。

「沢のあたりでしばらく昼寝をし、それからまた歩いてゆくうちに、暗くなってきたんです。それでもさらに行くと、沼があつて、思いも寄らぬことでしたが、そこで、蛍の大群が舞うのに出あいました。たくさん蛍でした。もう、帰りの時間なんてどうでもいいという気持ちになつて長い間、ぼーっとしてながめていました」

沼のほとりで、蛍の大群に出あい、たたくみ、ぼんやりした時を過ごす。「もう、帰りの時間なんてどうでもいいという気持ちになつて」というところがいい。

帰りの最終は何時だから、何時には山を降りはじめないといけない、などときちんきちんと考えていたのでは、思いつきりぼんやりの時を過ごすことはできない。

場合によっては、一晚、そこで寝てしまつてもいいという気持ちになる。旅の名手とは、そのように自在なたのしみ方を知ることを使うのだろう。

目標をきつちり定め、予定の時刻を設定し、その計画に沿つて時間通りに歩くという人もいる。人の流儀はそれぞれ違うからどちらがどうとはいえないが、私自身は、あまり目標を定めないうで自在に歩く旅が好きだ。といつても、山を歩き、でたとこ勝負で一晚を過ごす、というほどの自在な旅はしない。ぼんやりに徹しきれない自分がいる。

「ぼんやりすること」にはさまざまな局面がある。もちろん負のイメージをもつぼんやりも少なくない。

しかしながら、ぼんやりが「よからぬこと」だと決めつけてしまうのもおかしい。実際には、プラスになるぼんやりがたくさんあるし、生きる糧を与えてくれる、ごく大切なぼんやりもある。勤勉は善、ぼんやりは悪、という議論に逆らつて、ぼんやりは貴い、といったのは、串田が世の風潮に逆らうことを大切に人だつたからだろうか。

子どもの場合も、ぼんやりすることは大切だろう。ぼんやりしている間に子どもは育つ。ぼんやりしている間に子どもがどれほど育つかわからないのに心配ばかりしている親もいる。そういったことを指摘したあと、串田はこう結んでいる。

「ぼんやりするのは、ちょうど蛹(4)の時期にあたると思つていい。蝶は幼虫から直接翅が生えて空に飛び立つ訳ではない。羽化するためには、蛹となって静かに瞑想しているような長い時期がどうしても必要である」

蛹の時期があつて初めて、成虫の時期がある。蛹の沈黙があるからこそ、成虫のはなやぎがある。長い、静かな瞑想があるからこそ創造の力が湧いてくる。

詩人、岸田衿子に『急がなくてもいいんだよ』という題の詩集がある。近所の図書館の書棚でこの本に出あつたのは四、五年前、いや、もつと前だつたかもしれない。小型の本だつた。

題名にひかれて手にとる。ページを繰ると、冒頭に「南の絵本」という題の詩があつた。その一節に、

葉書を出し忘れたら 歩いて届けてもいい

走つても 走つても オリイブ畑は

つきないのだから

いそがなくていいんだよ

種をまく人の歩く速度で

あるいてゆけばいい

何回も読み返した。

そう、急がなくてもいいんだ。

目に飛びこんできた字句が、直截(5)にそう語りかけてくる。急ぐな、という強い調子ではなく、もしかしたら急がないほうがいいんじゃないかしら、という弱い調子でもない。ほどほどに強く、ほどほどにやわらかな調子で岸田衿子は呼びかけている。

「いそがなくてもいいんだよ」と。

ふと、夢想する。

葉書をポストに入れ忘れた人は、畑の果ての、そのまた果ての、さらに果ての町まで時間をかけて歩いてゆく。

私のなかには、オリーブ園やジャスミン畑のわきの道を歩く一人の娘さんの姿が浮かんでくる。娘さんは、地の果てまでつづく畑や畑のうえに浮かぶ雲をぼんやりと眺め、眺めてはまた歩きだす。オレンジ色のエプロン姿を照らす日の光がまぶしい。

娘さんは、オリーブ畑で働く知り合いの娘さんとおしゃべりを楽しみ、肩にとまったトンボと話をし、旧知のなんとかじいさんに出あえば少しの間いっしょに歩き、ジャスミンの香りに見送られ、そのようにして、急がずに歩いてゆく。そして、仲のいい友人の家を訪ねて葉書を手渡す。

手渡すときはなんとのおうか。

「郵便でーす」とのおうか。

「歩いてきちゃった。会って話をしたかったから」とのおうか。

百人がこの詩を読めば、たぶん百通りの「急がない葉書の届け方」を夢想することだろう。

俳人の中村汀女に、

啓蟄やわれらは何をか急ぐ

という句がある。岸田の「いそがなくてもいいんだよ」と対になるような作品だ。

啓蟄という季語が使われているところを見ると、冬ごもりを終えた虫や蛇やトカゲが動きはじめる季節、つまり命が新しく動きだす季節の句だろう。

四季の移り変わりにそってあるがままに、急がず、あわてず生きているものにくらべて、人間という生きものはなんとあわただしい生き方をしてることか、なにをそんなに急いでいるのかという思いが汀女の胸をよぎったのかもしれない。



季節のめぐるままに、季節のめぐる波にあわせて、もつと悠々と生きたい。風の声、土の色つや、雨の温かさ、木の芽のみずみずしさ、そういうものをじっとりと感じながら生きてゆきたい。この句からは、そんな祈りの声が聞こえてくる。

(A) 「急がない」ということと「ぼんやりする」ということは、もちろん、同じではない。

「ぼんやり」には「do nothing. つまり「何もしない」という感じがあるが、「急がない」には「なにかをしているけれども、その動作をゆつくりする」という意味合いがある。

この世の中のことは万事、そんなに急がなくてもいいんだ、わけもなく急ぎ足にならなくてもいいんだ、ということはある程度わかっているつもりでも、日々の暮らしではいついつい、急ぎたくなる。あせり、いらだつことがある。恥ずかしながら、私もそうだ。

駅の切符売り場で、前の人が支払いの小銭を出すのにまごまごしている。ようやく財布を見つけたが、こんどは、必要な分の小銭を見ながらぼんやり考え込んでいる。「早くシテクレナイカ、早クツ」。私は心のなかでキリキリしている。もう一人の自分が「ぼんやりは貴いなんて書いているのはお前さんじゃなかったっけ」と、いらだつ私を嗤っている。

さすがにこのごろは、年齢のせいで出発まぎわの電車に向かってかけつけるなんていう危険なことはしなくなった。眉間にシワよせて駆け込むことはやめ、次の電車を待たばいいんだと思うようになった。自分がそうなると、今度は逆に、かけこんで乗ろうと必死で走っている客を冷たく嗤う立場になるから困ったものだ。

私は一九三〇年、東京の下町に生まれ、すぐさま世田谷に移り、そこで育った。

あのころ、世田谷の家の周辺には田畑や雑木林や松林がたくさんあった。松陰神社のそばの川には、目高や鮒がいて、畦道には蛇がいて、夏には必ず、原っぱの上空にギンヤンマの群れが現れたものだ。赤蜻蛉の群れもやって来た。

近在の森には梟がいた。野原がたくさんあって遊び場のこと欠くことはなかった。雨に濡れた道を、牛にひかれた大八車が行く。糞が道に転がる。そう、牛や馬が荷を引く姿を学校への行き帰りでよく見かけたものだ。

あのころは、暮らしにゆつたりとした時が刻まれていたと思う。若い人には想像のつかないことだろうが、あのころの東京の世

田谷には、肥だめの臭う田園の風景があった。

(辰濃和男『ぼんやりの時間』による。原文の一部を改変した。)



